

出題の意図

■各科目の出題の意図

英語

Ⅱでは、社会、歴史、文化、科学など多様な内容の文章が出題されます。普段から書籍、新聞、ニュース等の身近な媒体を通じて知識を身につけ、社会や自然に対する問題意識や関心を持ち続けることが大切です。著者が設定しているテーマと、それがどのように論理展開されているかを正しくたどる能力が問われますので、英語で書かれた文章に限らず多くの本を読み、ものごとを論理的かつ簡潔に整理できるような思考訓練を積んでおくことがよいでしょう。使用されている語彙は、高校での学習範囲に準じた基準で収まるように修正されていますので、教科書や市販の参考書などで読解する際に辞書を活用して学習しておけばよいでしょう。また、学習範囲を超えるような語彙が出てくる場合も、前後の文章の流れから意味の推測が十分可能になっています。文法についても同様で、基本的な事項と具体的な文例等を正確に理解しておくことが重要です。

Ⅲでは、会話の脈絡を的確にたどり、話し手が次に発言しそうなことを予測する能力が必要です。口語表現の意味が問われますので、例えばラジオやテレビの番組を通じて、それらの使い方に慣れておくことが一つの対策になるでしょう。

Ⅳは整序英作文ですが、使うべき語彙はあらかじめ選択肢として与えられていますので、ここでは特に文法的に正しい文章を組み立てる能力が問われます。したがって、正しい文法知識を身につけておくことが大切なのは言うまでもありません。また、一つのやり方で行き詰ったときに、別の表現方法を探る能力も問われることになります。そのためにも、音読によって、基本的な文法事項に関連した文例を数多く習得し、様々なパターンの英語に慣れておくことが有効な対策になります。

国語

現代文、古文ともに標準的なレベルの問題ですから、まずはふだんの授業を大切に、反復練習によって国語の“力”を確実に身につけておくことが大切です。

そもそも、国語の“力”には、①基本的な読み書き能力(リテラシー)、②論理的な思考力と表現力、という2つの側面があるのではないのでしょうか。①は、たとえば漢字の知識や言葉の意味を把握した上で、文章を正確に読み取ったり適切に書いたりできる力のことです。文法や修辞技法、文の組み立て方なども含めて、日本語表現を構成する基本的な事項をどれほど知っており理解しているか、そしてどれくらい正しく使えるか、ということです。一方②は、ある文章について、それが表現しようとしている感情なり思想・主張などを成り立たせている枠組みや文脈を理解する力であり、それらをふまえて論理的に文章を書く力だと言えるでしょう。入試問題では、こうした“力”が問われるのです。

(一) (二)の現代文は、かなりの分量の文章をかざられた時間で読み解かねばなりませんから、構成や趣旨・主題をすばやく的確に把握する訓練が欠かせません。そのためにも、日頃からさまざまな文章に触れ、読解することが必要です。日頃から多くの文章を(時には繰り返し)なるべく速く読むことを意識し、文章全体の大まかな流れやテーマをつかむ経験を重ねてください。そうしておけば、内容理解や文の挿入位置など多くの設問に対応できるはずですよ。

空所補充や語句解釈などの問題も例年出されていますが、文脈のなかに適切な語句を挿入したり、文脈におけるある語句の意味するところを確定したりするためには、一つひとつの言葉が持つ微妙なニュアンスの違いに注意しなければなりません。ここでもやはり、ふだんからいろいろな文章を読んでおくことが大きな支えとなるはずですよ。ただし、これらの問題で求められるのは精読です。個々の表現に立ち止まり、一つひとつの言葉の意味を吟味し、辞書を引いて、語句の意味を確認しながらゆっくりと読み込む経験が求められています。そのようにして、語彙や慣用語、漢字の知識をひろげ、深めていく心がけてください。なお、(一)の問一は漢字の知識を問う問題ですが、原則として常用漢字の枠をはずれることなく、文脈のなかで漢字の意味が正確に把握できているかどうか重点をおいた設問になっています。問われているのは、あくまでも国語の基本的な“力”なのです。

(三)の古文も同様です。基本語彙(重要古語)と古典文法の基礎を正確に理解し、敬語などを手がかりに文の主語・述語関係を見誤らずに読むことができれば、それほどむずかしい問題文でも設問でもありません。とはいえ、古語や文法を丸暗記することが有効な対策とは言えません。むしろ、具体的に古文を読むなかで、辞書で調べ確認しながらそうした知識・学力を修得するほうが、結果的に応用力もつき、入試問題にも対応できるのではないのでしょうか。その意味で、要点は現代文と変わらないはずですよ。ちなみに、古典文法と古典文学史について必ず最低1問ずつ出されていますが、現代文でも文法や文学史を問うことがあります。国語便覧などを参考に、基本事項を復習しておきましょう。

入試対策に必勝法はありません。急がば回れ。成功への近道があるとすれば、それは何よりも地道に基礎学力を積み上げること、言葉への自覚的態度と知的好奇心とを養うことにちがひありません。

日本史

歴史は、政治・経済・文化などが個別に存在しているわけではなく、いろいろなことが互いに作用し関わり合って展開しているものです。そのことに注意して教科書を繰り返し読むと、歴史において部分と全体とが緊密な関係をもっていて、時間的空間的に連続していることが見えてきます。単純に年代やできごと・人物名を記憶するのではなく、それぞれの有機的なつながりや意味を考えながら理解を深めるようにしてください。

例えば、昨年度の問題では、関連する出来事を古い順から並べ替えるものが4問あり、歴史の流れを把握していることが求められています。そのほか、ある出来事の前年に起きたことや、それと同年の出来事を問うものも毎年のように出されており、逆に、年代自体をシンプルに問う問題はほとんど出されてこなかったといえます。2020年度入試では、漢字一文字ずつの選択肢から二つを選んで、一語を完成させるという問題も出されました。こうした問題に対応するには、用語を単に丸暗記するのではなく、それ自体に込められた意味について深く考えることが必要となります。2019年度には、ペリーが浦賀に来航した「癸丑」年(1853年)の次の「癸丑」年(1913年)におきた出来事を問う問題が出されました。干支が60年で一巡することを知らなければ正解を導くことができない応用問題です。また2018年度には、人名を正しく漢字で表記できるかを問う問題も出されています。

このように、単なる丸暗記では対応できない問題が多く出されてきたことからすれば、まずはそれぞれの時代を大づかみすることからはじめて、歴史的な因果関係に留意して、より深く個別の事象を見るようにすることが大切です。また、史料は歴史叙述の証拠として重要ですから、特に教科書に収載されているものは必ず目を通して、そこから何がわかるのか、よく考えておいて下さい。

くどくなりますが、自分なりの問題意識をもって教科書を読むと歴史への関心は高まり、繰り返し読めば用語も次第に覚えることになるでしょう。そして、頻度の高い事柄は必ずと記憶することになりますから、できるだけたくさん問題を解いてみることで、本学の過去問題に慣れておくことは言うまでもありません。

世界史

龍谷大学の世界史は、教科書をよく読むことはもちろんですが、年表や図版・写真などにも目を配っているかなど、総合的な理解度を問うことを意図として出題しています。教科書に載っているような歴史的な事件はどれも、事件が生じた地域だけでなく、その周辺の地域や、場合によっては、はるか遠い地域にまで波及し、時期的にも数十年、さらには何世紀も後の人々の政治や生活に影響を与えることがあります。こうした関連性や影響を理解するためには、年表・図版・写真の活用は欠かせません。それらを活用して歴史に関心を持ち、歴史はおもしろいと思ってもらうことが大切だと考えています。ぜひ、年表・図版・写真などを見て、あれこれ想像力をふくらませてみてください。

このような観点から、龍谷大学の世界史では地図がよく使われます。これは、受験生の皆さんに歴史の流れや地域相互の横の関係を考えてもらいたからです。現代は、情報化社会、グローバル化の時代などよく言われますが、人・モノ・情報の移動・交流・流通は、歴史的に見れば特に新しいことではなく、はるか古代からあったことであり、それぞれの時代や地域に応じて行われていたことなのです。写真や図版が多く出るのも、そのようなことを踏まえて設問を作成しているからです。

龍谷大学の世界史では、事件の起こった細かな年代を問う設問はほとんどありません。王朝が交代した年や革命が起こった年など、大きな歴史的事件の年代を覚えておくことは、世界史の学習には有益なことですが、年代の暗記にこだわるのはあまりよくありません。それよりも、大きな歴史の流れの理解に時間を割くことが重要です。事件の起こった順番を問う問題も時々ありますが、すべての出来事の順番を正確に覚えていなくても、重要な事件の前後関係とその流れを理解していれば、正解にたどりつくように出題されています。大きな歴史的事件の前後の流れや各地域の関連をつかむ努力をしておけば、高得点が期待できるでしょう。現代史に関して言えば、新聞やテレビで、海外のニュースに日ごろから関心を持っておくことも大切です。

問題文はかなり長いものもありますが、文章を読み解く能力は国語に限らず、すべての教科に必要な基礎学力です。過去問を解いてみる場合、あるいは受験当日でも、ただ単に問題を解くのではなく、問題文の作成者がどのようなことを意図し、何を問うているのかを理解するように心がけてみてください。それが思わぬ勘違いやケアレスミスを防ぐことにもなります。

政治・経済

教科書や授業などによって政治・経済に関する基本を理解することがまず大切です。この科目に限らず、学習において正しい知識を習得することは大切ですが、「なぜそうなのか」や、その問題の背景を考え、知識をテーマごとに体系化してください。本学や大学入試センターの過去の入試問題を解いた後も丁寧に考察することが必要です。とりわけあなたが解答を誤った問、解答があやふやであった問に対しては、きちんと理解しておくことが大切です。

2020年度の問題も法律・政治分野、経済分野、社会分野の3つのすべての分野から出題されると思われるので、教科書全体を丁寧に学習してください。教科書の総ページ数は、日本史や世界史と比べて少ないですが、図表や脚注の重要性は高くなります。先生が授業で話される周辺のこと(必ずしも教科書には触れられていない)も教科書の内容の理解を深める意味でも意義があるので、注意して聞くようにしてください。

さらに、現代の政治・経済の理解に資するための歴史感覚を養い、この科目に関連する新聞などの報道にも関心を持ってください。この「政治・経済」については、2020年度の出題形式も、2019年度のそれと同じくマークシート方式となります。3つの大きな問題から成り立つといったような出題の様式も2019年度のそれが引き継がれるものと思われます。また、授業で教科書とともに配付される資料集もよく見ておいてください。

数学(文系・農学型)

どの日も3題出題され、全問が記述式です。あたえられた問題を読みとって理解する力、論理的に考える力、さらにていねいな計算、ていねいな作図など問題を正確に処理する力、また正しい答えを人がわかるように説明する表現力を、総合的に発揮してもらうためです。

数学的知識としては、したがって、教科書を理解する程度で十分です。満点をとることも不可能ではありません。出題される問題も、教科書の基本的問題、標準的問題が中心です。

なお、以上のような趣旨から、正しい結論が書かれていたからといって満点とは限りません。逆に、正しいすじ道で解答しながら、何らかのミスのため正しい結論に到達しなくても、必ずしも零点とは限りません。

数学(理工型)

数学(理工型)では、数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学Ⅲ・数学A・数学Bの「数列」と「ベクトル」が出題範囲で、高校で広く数学を学習し、理解したかを判定しています。また、すべての入試は「論述式」で、最終的な答えだけではなく、答えに至るまでの論理展開や途中計算の正しさを重要視し、解答の筋道が採点者に明確に伝わるような答案を期待して出題しています。

物理(理工・農学型)

基本事項を理解して正しく使いこなせば解答できる問題なので、教科書や問題集の標準的問題を偏りなく解くことが重要です。特に、数値を代入した計算や、複数の式を変形して解答を導出する問題の正答率が例年低いので、問題の解答を眺めるだけでなく、実際にノートに書いて計算するようにして下さい。また、基本事項でもパターンからはずれた尋ね方をすると正答率が意外に低い場合があります。難問の解法パターンを記憶するより、標準的問題を自分で納得してきっちり解けるようにして下さい。

こちらが用意した選択肢の中から正答を選んでもらう形式なので、自分で式の計算を始める前に選択肢を一覧し、どんな記号を使った答えが要求されているかを確かめておくと効率がよいでしょう。問題文の中に解答のヒントが含まれている場合もあります。文章を注意深く読む習慣をつけておくとよいでしょう。また、物理で出てくる記号にはすべて単位がついています。自分の得た式の単位が要求されている量の単位に一致しているかを確認すれば間違いを少なくできるでしょう。

化学(理工型)

まずは、「化学基礎」および「化学」の全範囲において、基本となる項目をしっかりと理解しておくことが重要です。基本的な物質・化合物の名称とそれらの化学式、構造式、性質をすぐに書き出せるようにしておきましょう。結晶構造については、それぞれの結晶の特徴を理解し、単格格子の大きさから密度を算出できることが求められます。化学において重要な法則や関係式をその意味も含めてよく理解し、それらの式を活用できるようになることが大切です。それらを何度も繰り返して、式を活用する際のケアレスミスをなくす努力をしましょう。いくつかの問題集にある基本的な問題に数多く取り組み、出題の意図を正確に読み取る訓練を行い、それぞれの問題に適した方法で解いていく経験を積んでおくと良いでしょう。

生物(理工型)

理工生物は基礎知識を問う問題がほとんどですから、高校までの生物の教科書の基本的な内容をよく理解しておくことが重要な対策となります。ただし、教科書で説明されている語句をそのまま記憶するのではなく、関連分野間のつながりをきちんと理解しておくことが大事です。理工生物の一つの特徴に、知識を問うのではなく、実験・観察の結果を読み取って解釈させたりするような論理性を問う出題が挙げられます。教科書の「課題研究」や「探究」などの項目も併せて学習し、「なぜそうなるか」を考える癖をつけておくと良いでしょう。理工生物では、それほど長くはないものの論述をさせる問題も出題されますので、正しい文章で、論理的に説明できるように対策を練っておくと良いでしょう。

化学(農学型)

まずは、教科書に記載のある基本事項をしっかりと理解することが大切です。基本的な物質・化合物の名称、化学式・構造式や性質については、きっちり覚えることが必要になります。また、重要な化学反応についても、よく理解することが大切になります。

また、実験方法やそれに用いる器具などについても理解しておいて下さい。計算問題も敬遠せずにきちんと取り組めるようになって欲しいと思います。また、油脂、糖、アミノ酸、タンパク質などの天然有機化合物は農学と深く関係しています。もし、高校の授業進度が遅い場合は、教科書を先取りして意欲的に勉強してください。

生物(農学型)

生物の幅広い分野から、まんべんなく出題されます。得意不得意の領域を作らないことが大切です。各項目の基本事項の確認を大切にしましょう。また、その事項の発見経緯や実験事例などもあわせて覚えておくとよいでしょう。計算や考察問題も含まれますので、基本的な計算問題はマスターしてとともに、普段より論理的思考力を鍛錬しておきましょう。